

水 稲

今年の稲作の後始末と来作への準備

◆秋作業の後始末

コンバイン・乾燥機・粃すり機・ライスグレーダーなどの秋作業で使った機械類は清掃と作動状況の点検を行います。部品交換や専門の修理が必要な場合には、早目に依頼して冬の間を整備を済ませておきましょう。

また、開口部のカバーや忌避剤の活用で、機械内へのネズミの侵入を防止しましょう。

◆田の排水と面直し

除草剤を使ったのにヒエなどの雑草が繁茂したり、場所によって苗が水没したりしませんでしたか。

水稻用除草剤の多くは、施用後1週間程度の間、田の表土が水面下にある必要があります。

田面に高い所があって、水から出てしまうと、有効成分が分解するなどして、期待した効果を得ることができず、雑草が生えてしまいます。また、田面の低い所では苗が水没して、生育遅延などの影響が生じます。

来年の稲作のためにも、今のうちに高低差をなくすよう、面直しを行っておきましょう。

面直しは、しっかり排水をしてから、土の移動を行って均平化を図ります。土づくり作業は、面直しの後に行うのが基本です。

◆土づくり

刈取時にカッターで切り落とした稲わらは、来作のための有機物となりますが、未熟な状態ではワキ(分解に伴うガスの発生)の原因となります。わらを分解する微生物が活発に働く期間を確保するために、出来るだけ早く腐熟促進材とともにすき込むようにしましょう。

土づくり資材や秋落ち対策資材は、腐熟促進剤と同時に散布が理想ですが、春の耕耘前までに施せば効果を発揮します。これらの資材は散布量が多いので、労力に余裕がある時に効率よく行いましょう。

◆稲わらの腐熟促進材

わらゴールド 2袋 (30kg/10a)

または石灰窒素 1袋 (20kg/10a)

◆土づくり資材 (けい酸・りん酸・苦土などの補給)

ニュー地力アップ 5袋 (100kg/10a)

または、ようりん 1.5袋 (30kg/10a) + ケイカル 7.5袋 (150kg/10a)

◆秋落ち対策資材 (鉄分の補給)

転炉さい 5~10袋 (100~200kg/10a)

◆漏水防止対策

水持ちが悪くて困りませんでしたか。

畔塗りが不十分な場合や、モグラの穴等による漏水の場合も少なくありません。

しかし、耕土の浅い田では、トラクターが傾いた状態での耕耘や、旋回時に深すぎたために、すき床が破壊されている場合もあります。この場合は、その部分の床面に土を数cm客土して床締めを行います。

客土が困難な場合は、作土を除去した床面にベントナイト(吸水して膨張し、漏水防止効果がある鉱物資材)を1~2kg/m²を散布・鎮圧して埋め戻すことで改善が図れます。

ベントナイトは25kg/袋のものをJAで取り扱っていますので、支店等にお問い合わせください。

◆ジャンボタニシ対策

ジャンボタニシは、土に潜って越冬します。

発生田では、越冬中の貝の密度を下げることで来作の被害を軽減しましょう。

冬季にロータリーの回転を上げて低速走行で2~3回耕耘を行い、貝の破碎や寒気による殺貝で駆除を図ります。ほとんどの貝は6cm以内の深さで越冬していると言われています。

また、水路等の越冬貝には、地域ぐるみの泥上げが効果的です。

野菜

11月から冬に向かっての野菜管理

◆露地軟弱野菜(ネギ・花菜・コマツナ・ホウレンソウ)

日照時間が短くなり、陽光も弱まるので、12月後半から2月前半までは目に見える生育が望めません。

ネギ・花菜は9、10月中に、他は11月中に計画的な作付けを済ませましょう。

◆露地玉菜類(キャベツ・白菜)

品質の良い収穫物を得るためには、11月の生育が最も大切です。間引き・本立て後10日～2週間毎に追肥・中耕・土寄せを行い、旺盛な生育をさせてください。

※注意が必要な病害虫

ネギ ネギコガ、ネギハモグリバエ、シロイチモジヨトウ、さび病、べと病

アブラナ科野菜(キャベツ・白菜・花菜・小松菜)

ヨトウムシ類、ハスモンヨトウ、アオムシ

黒腐病、軟腐病、菌核病(キャベツ)

白さび病(花菜)、べと病、白斑病(白菜・小松菜)

ホウレンソウ アブラムシ、ハモグリバエ、シロオビノメイガ、ヨトウムシ、べと病、

◆施設野菜(トウガラシ・トマト・キュウリ・シュンギク)

果菜類は12℃位を境に生育が停止します。ハウス栽培では昼間に作物の生育と地温の上昇を図り、夜間は内張りカーテン(天・側面)で、トウガラシでは15℃、キュウリでは13℃、トマトでは12℃以上を確保します。日中は30℃超えないよう換気に留意します。温度管理を自動化している場合は気象経過に注意し、こまめに点検しましょう。低温限界を維持できない場合は暖房器具の稼働が必要です。同じハウス内でも北西端は温度が低い場合があるので実測点検が必要です。

春菊のハウス栽培は10℃～20℃の範囲で管理

し、低温及び26℃以上の多湿を避けるよう保温と換気に注意します。

定植後15日位から収穫可能です。摘み取栽培では、2週間毎の追肥で長期間、出荷できます。

長期出荷のためには、12月後半から内張りカーテンが必要となります。露地やトンネル栽培では低温の影響が大きく、生育に期間を要します。

※注意が必要な病害虫

トマト、キュウリ、トウガラシ

アブラムシ、コナジラミ、アザミウマ

うどんこ病、灰色かび病

トウガラシは斑点病にも注意が必要

春菊 アブラムシ、ハモグリバエ、炭そ病

◆主な防除資材

*アブラムシ類の春・秋の飛来虫には銀テープを作物の生長点付近に展張すると忌避効果があります。

*施設内では粘着テープや粘着板を活用します。黄色はアブラムシ類・コナジラミ類に、青色はアザミウマ類を誘引し、高い補殺効果があります。施設外では粘着資材はホコリやゴミの付着により、粘着効果が落ちて捕殺効果がなくなり、逆効果になるので使用しないでください。

*ハウスサイドの防虫ネット張りや防虫ネットトンネル、防虫ネットハウス等を作付時から適切に活用すれば農薬以上の防除効果が期待できます。防虫ネットは目的害虫により網目が異なります。

*ネギのネギアザミウマに赤色ネットの侵入防止効果が認められています。ネギアザミウマは多発すると食害だけでなく、ネギえそ条斑病を媒介するので、低密度に抑えることが大切です。

TAC巡回現場より ～イネの異常気象対策とけい酸加里について～

近年、地球温暖化等の影響を受けて夏場の高温が問題になっています。

夜温を含めた極度の高温は乳白米の発生など品質低下の一因で、9月から始まった米検査でも乳白米が多く見られます。この対策として、登熟期のけい酸加里が目目され、施用が増えています。

◆なぜけい酸加里は異常気象に効果があるの？◆

けい酸加里は根の伸長を促進して養分吸収の手助けや、稲体を丈夫にするため倒伏に強くなります。

また、高温時の気孔の開閉をスムーズにして蒸散量を多く維持することで稲体の温度が上がりにくくなり、乳白米の発生が軽減されたとの報告もあります。一方で、日照不足時には登熟期の光合成を活発にし、デンプンの生成を盛んにし、登熟不足を防ぐとされています。

◇米の品質低下にお悩みの方◇

中干し期まで(出穂45～35日前)に20～40kg/10a施用します。

令和5年産米の品質向上のために、ぜひ予約注文に加えてください！！